

# 「障害者差別解消法」来月施行

# 学びの現場で柔軟対応

障害者の暮らしを妨げる差別や排除を禁止する「障害者差別解消法」が四月に施行される。公立学校では、障害児への配慮が義務付けられる。教育現場の対応を追った。(佐橋大)

岐阜県川辺町の川辺西小学校では、全身に重い障害のある五年生、羽木月音さんの介助で、女性の支援員が二回から付いている。支援員は校内で羽木さんのトイレや食事の介助をする。羽木さんを抱えて一階から教室のある三階に移動することも。給食は、かんでのみ込むのが苦手な羽木さんのために細かく刻む。同級生も手伝う。学校によると、障害児への理解が乏しに広がっているという。支援員が付いたことで、羽木さんは他の子と同じよ



支援員の介助で、みんなと一緒に給食を食べる羽木月音さん。給食は食べやすいように細かく刻んでいる。岐阜県川辺町の川辺西小学校で

ここに、親が付き添わなくても学校で過ごすようになった。障害に対応した支援を提供することで、皆と同じように勉強できる。障害者差別解消法が掲げる「合理的配慮」の一つの形だ。

文部科学省は、配慮の例として、建物のバリアフリー化や支援員の配置に加え、読み書きが難しい子に、その困難を減らすタブレット端末の使用を授業中に許可することや、人前で

## 支援員配置、端末も導入

合理的配慮は、過重な負担にならない範囲で、障害のある子どもも十分な教育を受けられるように環境を整えたり、授業の方法を工夫したりすることだ。

の発表が苦手な発達障害の子どもに、代わりの措置としてリポートを課すといった対応を挙げている。表。最近では地域の小中学校で、発達障害の子どもの手

### 合理的配慮の例

- 知的障害の子に、理解の程度に応じ、分かりやすい教材を準備する
- 聴覚過敏の子のため、机や机の脚に緩衝剤を付けて雑音を減らす
- 体が不自由な子どもも参加できるような体育の車いすの使用を許可するなど体育の授業を工夫する

助けする支援員の配置が進んでいる。差別解消法は、その流れも後押しする。名古屋市は二〇一五年

度、五十七の小中学校と幼稚園に発達障害を専門とする支援員を置いている。一六年度には、支援員を三百五十人増やし、市内の余小中学校に配置する予算を編成した。授業の準備が苦手な子には準備が進むよう助言したり、他の子どものコミュニケーションが苦手な子には適切な対話が進むよう調整したりする。

障害者差別解消法 障害を理由とした不当な差別を禁止した上で、費用や人手がかかり過ぎない範囲で設備やサービス提供の方法などを整える「合理的配慮」を国や自治体、国公立の学校に法的に義務付け、民間事業者には努力義務とした。

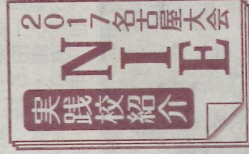
## 機会の平等目指す

等」を重視してきた。その結果、機会の公平性が損なわれてきた。これからは機会の平等のために、障害と文字の読みにくい人には、文字を読み上げる機材を使うなど、個々の障害に対応していきたいましようということ。その基礎になるのが障害者差別解消法だ。学校は、特別扱いに不満を持つ人にも、堂々と差別解消法に基づき対応していると説明できる。配慮の内容や過度な負担の程度

を一律に決めていないのも、この法律の特徴。配慮の内容は、障害によって変わる。例えば、視覚障害者にも、点字を読み取れない人がいる。その人に点字で情報を提供しても、障壁は除去できない。どうしたら障壁を除去できるか、学校と障害児の保護者が話し合い、合理的配慮を決めるプロセスが大切だ。経験を積み重ねて、皆が学びやすい学校に変わる。

市の担当者は「解消法も踏まえた」と説明する。応募は定員の九割にとどまったため、市は「二次募集をする」。

市内の小中学校には、胃腸障害や医療的ケアなど、それぞれに対応できる人を集めるのは簡単でない。人員による介護が必要な子が約百人いる。担当者は「発



愛知県一宮市の神山小学校の六年一組の児童たちはこの一年間、新聞を活用して思考力を養うことと文章力を磨くことに努めてき



た。昨年四月、まず実践したのが朝の会でのスピーチ。児童が一人ずつ交代で気になった記事を切り抜き、その内容と自分の考えを発表した。続いて新聞のコラムを使った宿題にも取り組

### 愛知県一宮市神山小学校

## 児童の視野が広がる

み、書き写したり、見出しを付けたりした。これに加えて、一学期には担任の脇田豊教諭(仮)が選んだ記事の話題についてグループで討論した。二学期は「よりよい未来」を考

新聞切り抜き作品の制作に取り組む児童ら(神山小提供)

一として記事の内容を根拠に見直し一人一人が意見を述べた。そして最後に挑んだのが、新聞の切り抜き作品の制作だ。「自分と社会とのつながりを考えられるようになってほしい」。こんな脇田教諭の願い通りに、児童はそ

れぞれ視野を広げていった。「戦争が残酷なものだ」ということが分かった。もう一人体験者の話を聞き、自分たちが次の世代に伝えていかなければならないと児童の一人、子どもたちの成長に、脇田教諭は「私が一番驚いています」と笑った。